様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　２ 日現在

機関番号：３４５０９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ０２４４３

研究課題名（和文）夜間中学における教育実践とその学びに関する研究－夜間中学生の過去・現在・未来－

研究課題名（英文）A Study on Educational Practice and Learning in Evening Junior High School -Past, Present and Future of Evening Junior High School-

研究代表者
水本　浩典（Mizumoto, Hironori）

神戸学院大学・人文学部・名誉教授

研究者番号：３０１４０３９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　当初企図した夜間中学生及び夜間中学生への聞き取り調査によるデータ分析からのアプローチは、2020年度以降のコロナ禍下では不可能と判断し、一部研究手法を修正しながら実施していった。その成果を、以下のようにまとめた。
　①閲覧と調査を許可された夜間中学関係資料の膨大な資料群である髙野雅夫資料を、現代の大学生が学ぶことを通じて、夜間中学生たちの学びに関する状況を大学生が学び、将来に生かすことが可能であることを提示できた。
　②従来、見過ごされがちであった義務教育の学力修得の問題について、髙野雅夫から提供を受けた中学校卒業者による学力未達成に関するる問題提起について焦点を当てることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　夜間中学生及び夜間中学卒業生の学びを修得するための努力を、現代の大学生が将来自分自身が教育者に育つための有益な学びの材料になることを提示できた。つまり、夜間中学の新設だけに注力するのではなく、夜間中学での学びを充分認識し理解した教員を養成するためには、過去の関係資料である髙野雅夫資料などが非常に有益な教材となることを提示し得た。
　「形式卒業者」と称して、中学校の卒業を単なる年限だけの終了でいいのか。義務教育として十全な学力を修得できなかった中学校卒業者が、髙野雅夫とともに鋭く問いかけた問題は、現代の義務教育の置かれている学力賦与の質の問題とも関連させて、重要な問題提起であることを指摘した。

研究成果の概要（英文）：The originally planned approach of data analysis based on interviews with junior high school students and night junior high school students was judged to be impossible under the corona crisis after 2020, and was implemented while modifying some research methods. The results are summarized below.
(1) Through studying the Masao Takano materials, which are a huge collection of materials related to evening junior high school, which are permitted to be viewed and researched, university students can learn about the learning situation of night junior high school students and make use of them in the future. I have shown that it is possible.
(2) Regarding the issue of scholastic achievement in compulsory education, which has tended to be overlooked in the past, I was able to focus on the problem raised by junior high school graduates who were provided by Masao Takano regarding their underachievement of academic ability.

研究分野：史料（資料)学分野

キーワード：夜間中学　大学における教員養成　義務教育機関としての夜間中学　夜間中学生の学びの質　髙野雅夫　夜間中学関係資料　教材としての夜間中学関係資料

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者である水本による阪神・淡路大震災時に作成された震災資料に対するアプローチから始まった。特に、主要なフィールドとした神戸市長田区を中心に実施した資料調査や現地調査を通じて、かつて神戸市長田区番長地区にあった神戸市立丸山中学校西野分校跡地に放置されていた西野分校関係資料の発見と整理を開始したことがきっかけである。この西野分校跡地残留関係資料の整理を進める過程で、髙野雅夫氏の知遇を得たことから、長年にわたって髙野氏が集積して保存してきた夜間中学関係資料の存在を知ることに繋がった。

2021 年段階から急速に全国の自治体がこぞって夜間中学の新設を検討・設置するようになってきた。そのなかで、水本や研究分担者である金益見は、夜間中学における教育実践の具体的な様相を把握したいと考えるに至った。特に、義務教育を修了していない学齢超過者や中国からの帰国者がどのようにして、日本の義務教育の学びを修得していったのかを把握することが、盛んに新設される夜間中学の教育にも資する研究になると考えてのことであった。

(1)髙野雅夫蒐集し保存してきた夜間中学関係資料との出会い

研究代表者である水本は、長年にわたる日本古代法制史料についての史料学的考察の経験と、それを活かした阪神・淡路大震災時に作成された震災資料の整理と分析を行った経験を、夜間中学に関する膨大な資料群である髙野雅夫資料（以下、髙野資料と略す）の整理と分析に活かすことができると考えた。

(2)夜間中学生等への聞き取り調査の経験を持つ研究分担者

研究分担者である金益見は、長年大阪の自主夜間中学である（識字教室とも称する）生野オモニハッキョの支援者としての経験を持っている。本研究の主要な柱である夜間中学生及び夜間中学卒業者に対するアプローチには最適の人材と考えた。

また、同じく研究分担者である浅野慎一は、長年、中国からの帰国者の学びについての聞き取り調査などを行っている。日本文化や日本語を知らない中国帰国者の学びの獲得について調査分析するには最適の研究分担者である。

以上の状況を勘案しながら本研究の全体プランを構築した。

２．研究の目的

本研究は、夜間中学生の置かれた過去の状況、そして、現在の現状、最後に未来について、連続的な「学び」の考察を行うことで、夜間中学生たちが獲得した「学び」の実像を把握することを目的とした。

(1)夜間中学に関する関係資料を集積した髙野資料の整理と分析を行う。

この作業を通じて、夜間中学生たちの「学び」についての史料学的分析を可能にすることである。10 万点以上にもなる髙野資料については、その全体像を把握する作業などほとんど手付かずの状態であった。そのため、髙野資料の全体像の概略を把握する作業は必須の作業である。

そのうえで、髙野資料のなかから夜間中学生たちの過去の「学び」と夜間中学の実像を髙野資料を根拠とした分析と整理を実施する。

(2)研究分担者の経験を活かした夜間中学生・夜間中学卒業者を対象とした聞き取り調査を実施する。

研究分担者・金は、主に支援者としての実績を活かして大阪で運営を続けている生野オモニハッキョの参加者のなかから、夜間中学生及び夜間中学卒業者を抽出し、本人からいかにして夜間中学での授業を自分の「学び」に連結していったのか、そのデータを集積し分析する。

研究分担者・浅野は、日本に帰国した中国帰国者のなかから夜間中学に通学している方々や夜間中学を卒業して実社会で活躍している人たちを選定し、中国帰国者の「学び」に特化した「学び」の獲得方法や達成経験を聞き取り手法を使って蒐集し分析する。

３．研究の方法

本研究を実施していくうえで最大の問題点は、2020 年度から蔓延したコロナ禍の影響が大きく本研究の主要な柱として設定した夜間中学生及び夜間中学卒業者への聞き取り調査が実施不可能となったことである。

(1)夜間中学生及び夜間中学卒業者を対象とした聞き取り調査の一部修正

対象となる夜間中学生及び夜間中学卒業者の多くが高齢者であるため、対面での聞き取り調査がコロナ禍では実施できないと判断して、本研究の研究方法の一部を変更・修正せざるを得ない事態に立ち至った。そのため、研究分担者・金は、水本とともに髙野資料の整理と分析の一翼を担うことにした。また、研究分担者・浅野も、浅野が長年にわたって調査してきた中国帰国者の聞き取り調査データのなかから、夜間中学生及び夜間中学卒業者に該当する方々の聞き取りデータから本研究に合致した部分を抽出し分析するやり方に修正を行った。

(2)膨大な髙野資料の整理を学生たちとともに実施

髙野資料は、10 万点以上にのぼる膨大な資料群であるため、水本などの独力での整理作業は不可能だと考えて、資料整理の基礎的作業を学生たちとともに実施することにした。その作業を通じて、髙野資料の全体を概略把握するとともに、興味を持ってくれた学生たちとのオン

ラインによる遣り取りなどを通じて、高野資料のなかからどのような問題点や問題関心を引き出せるかを検討・実施し、それらを卒業論文として書く作業を通じてより充実させることによって、夜間中学生たちの「学び」を大学生たちの「学び」としても結実することができると想定して、そのような作業を行なった。

４．研究成果

(1)コロナ禍の期間中に本研究を実施する大きな制約の影響

本研究の３年間の研究期間は、まったくコロナ禍の蔓延と社会活動の自粛が拡がる時期と合致することとなった。そのため、当初予定していた夜間中学生及び夜間中学卒業者を対象とした聞き取り調査データの分析と、膨大な高野資料の整理・分析を融合させて研究実績に繋げることが出来なかった。そうしたなかで、次のような研究上の成果を提示することができた。

既に高野資料に収蔵された夜間中学関係書籍の書籍目録（水本「高野資料・夜間中学テーマ書籍目録」『人文学部紀要（神戸学院大学）』40 号、2023.3）と、同じく高野資料にある雑誌を中心に夜間中学関係の記事及び高野に焦点を当てた雑誌記事などを集約し目録化（水本「高野資料・雑誌記事目録」『人文学部紀要（神戸学院大学）』40 号、2023.3）などの成果を基礎に、学生たちが思い思いに卒業論文として設定したテーマについて、より深化させていくことで、高野資料を活かした、かつ、学生目線での考察が可能であることを示すことができたと考えている。

具体的には、その成果を、水本・金編著のかたちで『こんばんは、夜勉です。－大学生が夜間中学を学ぶ－』（神戸新聞総合出版センター、2021.9）として出版した。その内容は、

①史料（資料）学的なアプローチを得意としてきた水本が、なぜ、夜間中学関係資料にアプローすることになったのか、その経緯を提示した。

第１部　それは、大震災から始まった

１章　学生が導いた、震災資料へのアプローチ

２章　震災資料を学ぶ、から、夜間中学を学ぶ、へ

３章　夜間中学を学ぶ夜の勉強会

そのなかで、まったくの門外漢と言っても過言ではない水本が、如何にして阪神・淡路大震災時に作成された震災関連資料（以下、「震災資料」と略す）にアプローチすることとなったのか、その経緯を提示しつつ、震災資料へのアプローチを単に研究者が研究としてアプローチするのではなく、学生たちとともに震災資料を「学ぶ」姿勢が、夜間中学を学ぶ際に大いに役立ったことを提示した。そして、震災資料へのフィールド調査の過程で偶然に発見し隠滅の瀬戸際にあった神戸市立丸山中学西野分校（震災後に神戸市須磨区にある神戸市立太田中学校に移転し、現在も併設された状態にある）跡地に20年間放置されたままにあった神戸市立丸山中学西野分校跡地に残留していた夜間中学関係資料を発見し救出したことをきっかけに、高野雅夫という人物と出会うことになり、ひいてはそのことが高野雅夫が 50 年以上集積してきた高野資料との出会いに繋がったことを提示した。

そして、それまでまったく無関心・門外漢であった水本が、学生たちとともに夜間中学を学ぶことになったことを論述した。その手法も、学生たちとともに教員も同じ目線・地平で夜間中学を学ぶ作業を実施した点を大きな特色として提示した。

第２部　普通の大学生が学ぶ夜間中学

４章　「わらじ通信」から読み解く、高野雅夫の夜間中学存続運動

５章　50 年前のミネルヴァの梟は何を語ったか―証言映画『夜間中学生』が記録した現実―

６章　神戸市立丸山中学校西野分校 70 年の歴史

７章　天王寺中学校夜間学級 50 年の軌跡

膨大な高野資料のなかから、学生たちが自分の興味・関心から設定した卒業論文としてのアプローチが、高野資料を関係資料を学生らしい目線で分析することによって、学生も夜間中学を学ぶことができることを提示した。従来、ややもすれば、夜間中学をテーマにした研究は、研究者一個人の問題設定として学界で成果を提示される場合が多かったと考えている。しかし、高野資料のように、そこに夜間中学に関する関係資料が存在し、実際に自分の眼で読解し分析しみることによって、新しい夜間中学への「学び」が創造できたことを提示し得たと考えている。

第３部　夜間中学の周縁を学ぶ

８章　識字教室の役割－生野オモニハッキョの実践を事例として－

９章　識字教室・麦豆教室とひまわりの会を比較する

10 章　夜間高校生のエスノグラフィー

夜間中学に対する問題関心は、夜間中学を中心にした周縁の様々な問題にも発展させることが可能であることを提示した。なかでも、研究分担者である金は、長年にわたる識字教室（自主夜間中学）での支援者としての経験を、コロナ禍のなかで実際に識字教室参加者への聞き取り調査ができない状況を踏まえて、まとめたのが８章である。

また、大阪にあった識字教室・麦豆教室と同じような識字教室として長く活動する神戸のひまわりの会の活動を比較検討することで、両識字教室の特色を抽出した。特に、この卒業論文を執筆した学生はこのテーマを卒業論文としてまとめるために、２年以上にわたって実際にひまわりの会で支援者として参加した経験も踏まえて分析をしている。研究者が行う識字教室研究とは一味違った成果を提示できたと考えている。

最後は、やはり大学生が大阪の夜間高校の授業を１年間観察する機会を得て、夜間高校生の授業と生徒の学びについて考察している。

いずれも、第３部にまとめた諸論文は、執筆者本人が実際に識字教室や夜間高校に足を運び、その体験を活かした研究成果をまとめている点に大きな特色がある。

コロナ禍のなか、学生たち有志ととも夜に学ぶ「夜勉」のような「学び」の機会も奪われてしまったことも事実である。オンラインによる遣り取りは、実際にその場に足を運び自らも体験することによって獲得した情報を分析するといったアプローチは、今後、あまりできなくなっていくことも予想される現状にある。

②大阪で活動する「夜間中学卒業者の会」への参加と、そこから得られた知見を本研究に付加

その後、水本が行った髙野資料に対するアプローチは、髙野も参加する大阪を拠点とした「夜間中学卒業者の会」への参加に繋がった。その会のメンバーである夜間中学生の発言、夜間中学卒業者の指摘などを通じて、大阪という限定的な地域ではあるが、夜間中学生の置かれている現状などを考える機会を与えられたことは、本研究にとって非常に有益であった。

現在、全国の数多くの自治体が夜間中学の新設を検討し、続々と新しい夜間中学が誕生しつつある。これは、義務教育を統括する文部科学省の後押しも大きく影響している。しかし、唯一、大阪市だけは、全国自治体の動きとは真逆の施策を実施しようと計画していることを知った。

大阪市では、大阪市立天王寺中学校夜間学級と大阪市立文の里中学校夜間学級を統廃合し、2024 年度に不登校特例校に新しい夜間中学（１校）を併設する計画を立て、夜間中学生にはそのような計画があることすら教えないといった事実も知る機会を得た。大阪における夜間中学２校を統廃合し１校に減ずる計画に対し、夜間中学卒業者の会は、『天王寺・文の里夜間中学の存続を－生きる権利と学ぶ権利がすべてに優先する－』（解放出版社、2022.8）を出版して問題提起をした。水本は、「もっと知ってほしい！“あってはならない学校、しかし、なくてはならない学校”」、同時に金は、「夜間中学は、自分を取り戻す『みんなの居場所』」を寄稿した。

③髙野資料に触発されて夜間中学生に焦点を当てた研究成果の公表

前述の『こんばんは、夜勉です』のなかに所載した学生がアプローチした諸論考のうち、特に、７章の「天王寺中学校夜間学級 50 年の軌跡」のなかで、全国夜間中学校研究会（以下、全夜中研と略す）が毎年実施している研究大会を総括した『資料集』のなかから、天王寺夜間中学へ入学した入学生徒と卒業した生徒数の落差を表にして提示ている。彼は、天王寺夜間中学に意欲を持って入学した夜間中学生の多くが途中で挫折した結果、卒業者数が極端に少なくなっている現象を指摘した。まさに大学で学ぶ学生たちが毎年「留年」か「進級」か、そして無事「卒業」できるかといった大学で学ぶ学生が置かれている進級制度に大きな関心があって初めて焦点を当てることができた大きな問題点であったと考えている。

しかし、全国夜間中学校研究会が実施する研究大会は、単年度ごとに開催校が違い、開催年度ごとに作成される『資料集』も、参加教員だけに配布される内部資料である。髙野資料のなかには多くの全夜中研が実施した研究集会『資料集』が集積されている。単年度作成の『資料集』から天王寺夜間中学に関する部分だけに特化して、入学者数と卒業者数を比較提示するといった手法を学生が思いついたのも、髙野資料中に多くの全夜中研研究大会『資料集』が数多く集積されていたからこそアプローチできた研究手法であったと言える。

水本も、髙野資料中に残存する髙野雅夫が単独で制作し全国で上映会を行った映画『夜間中学生』関連資料（多くの音声テープや上映した 16 ㎜フィルム））を整理しつつ、その成果を公表した。水本「50 年前の夜間中学生肉声データ再発見とその意義」『人文学部紀要（神戸学院大学』43 号、2023.3)。同じく金も、髙野資料中にある 50 年前の「形式卒業者」が問題提起した義務教育を卒業することと、実質的に義務教育の内容を「学び」として獲得していない事実の落差を鋭く指摘した中学校卒業者の指摘に焦点を当て、「50 年前の『形式卒業者』の叫びとその波紋」（『人文学部紀要（神戸学院大学)』43 号、2023.3）にまとめた。

④中国帰国者による日本の義務教育制度内の「学び」の諸問題

上記に言及した夜間中学生徒及び夜間中学卒業者の多くは、長年日本で生活してきた在日の方々に対する教育実践などの問題について分析する場合が多かった。しかし、中国からの帰国者の多くは成人になってから帰国する場合が多く、その子弟も中国における教育しか経験していない場合がほとんどである。このような質に違いがある中国帰国者の「学び」に対して、研究分担者である浅野は、自身が長年関わってきた中国帰国者が日本に帰国後に獲得していく日本における義務教育との関連について、いくつかの論考として公表した。

(2)本研究から導かれる夜間中学生に関する研究課題

①夜間中学関係資料の蓄積・保存の必要性

髙野資料は、髙野個人が 50 年以上かけて営々と蒐集・保存してきた夜間中学関係資料の累積である。夜間中学に関しては、全国組織である全国夜間中学校研究会が存在する。しかし、毎年開催される研究大会も、当番校制度による単年度開催であり、その年度に集まった夜間中学教員による様々な報告も、当該年度『資料集』として刊行されるだけで、その年度に発表された貴重な教育実践報告や授業課題報告なども、その年度内での報告して消費されるだけに終わっているす。早急に夜間中学における教育実践や授業課題を集積する組織や場所が必要であると痛感している。

②夜間中学における義務教育の質に関する問題についての分析が必要

これは、約 50 年ほど前に当時の昼の中学校卒業者が、義務教育の質の問題と卒業という制

度とのギャップを鋭く指摘した。つまり夜間中学研究者のなかでは、ごく普通に使用されるまでになっている「形式卒業」（文部科学省では、このような「形式卒業」という用語はまったく使用していない）の問題である。当時、その中学校卒業者は「九九も知らない中卒者」と自らを表現して、学力がまったく伴わないままであっても修業年限が来ると卒業証書を機械的に発行して「卒業者」として認定している状況を糾弾していた。

この問題は、単に義務教育制度内の問題だけにとどまらず、高等学校や大学においてもその卒業制度とその修業期間中に獲得した学力が充分に伴っ制度設計になっているのかという重大な問題を孕んだ課題であることを認識し将来的な課題であると考えるに至った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 浅野慎一	４．巻 5号
２．論文標題 夜間中学とその生徒の史的変遷過程	５．発行年 2021年
３．雑誌名 基礎教育保障学研究	６．最初と最後の頁 77－93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 水本浩典	４．巻 5
２．論文標題 今、学ぶべき、「生き証人」髙野雅夫－大学が学ぶ夜間中学－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 砦（発行：夜間中学生歴史砦　夜間中学卒業生の会）	６．最初と最後の頁 3－8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 浅野慎一・トウ岩	４．巻 14－2
２．論文標題 中国残留日本人二世の生活史と社会文化圏の形成(中篇)－日	５．発行年 2021年
３．雑誌名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要	６．最初と最後の頁 99－109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 浅野慎一	４．巻 14－1
２．論文標題 夜間中学校とその生徒の史的変遷過程(後篇)－『60年の歩み　全国	５．発行年 2020年
３．雑誌名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要	６．最初と最後の頁 81－99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 水本浩典	4．巻 43号
2．論文標題 50年前の夜間中学生音声データ再発見とその意義	5．発行年 2023年
3．雑誌名 人文学部紀要（神戸学院大学）	6．最初と最後の頁 209－233
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 金益見・水本浩典	4．巻 43巻
2．論文標題 50年前の「形式卒業者」の叫びとその波紋	5．発行年 2023年
3．雑誌名 人文学部紀要（神戸学院大学	6．最初と最後の頁 103－127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 浅野慎一
2．発表標題 戦後中国における残留日本人の生活にみる地域構造
3．学会等名 地域社会学会第46回大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 浅野慎一
2．発表標題 中国残留日本人孤児にみる歴史問題の和解と市民運動
3．学会等名 日中社会学
4．発表年 2020年

１．発表者名 浅野慎一
２．発表標題 夜間中学とその生徒の史的変遷過程
３．学会等名 基礎教育保障学会第5回研究
４．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

１．著者名 水本浩典・金益見	４．発行年 2021年
２．出版社 神戸新聞総合出版センター	５．総ページ数 335
３．書名 こんばんは、夜勉です。－大学生が夜間中学を学ぶ－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	浅野　慎一 (ASANO SINICHI) (40202593)	神戸大学・人間発達環境学研究・教授 (14501)	
研究分担者	金　益見 (KIMU IKYON) (60624004)	神戸学院大学・人文学部・准教授 (34509)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関